

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4372800716		
法人名	有限会社 せせらぎ		
事業所名	グループホームせせらぎ		
所在地	熊本県上益城郡甲佐町白旗986		
自己評価作成日	平成30年7月1日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	公益財団法人 総合健康推進財団		
所在地	熊本市中央区保田窪1-10-38		
訪問調査日	平成30年9月20日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

できるだけ、本人や家族の思い、希望にあわせて、最後のときを迎えられるまで支えていきたいと思っています。十度者も多く、看取りに関しては、ご家族や、病院などと密に連絡を取り合い、その方を支えるために、職員だけでなくみんなで1つのチームとしてケアを考えています。質の高いケアを提供するために個別の研修計画を作成し、朝の送りや、ミーティング、研修会などを通して勉強し、努力しているところです。昔ながらの自宅に近い環境にあり、縁側からは季節ごとに色々な風景を楽しめます。地域との関わりについて、防災についても一緒に考えたりしています。運営推進会議を初めとした活動を中心に、認知症の人を支える地域福祉の拠点として活動できるように努力していきます。熊本県の認知症介護の実習施設です。皆様のご意見をいただきながら日々精進しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

古民家を活用した認知症デイとの共用型グループホームです。広大な田畑が一望に眺められる静かな環境の施設です。我が家にいるような暮らしぶりでの人らしい生き方を尊重されたケアであり自由空間があります。経営者である施設長は、認知症ケアの推進者であり、業界の指導的な立場です。熊本県の認知症介護の実習施設でもあります。平成12年から運営をされているので今後の方針として後継者の育成を考えています。更なるスタッフの強い意志と技術を熟知してほしいと力を入れています。豊かな人づくりと介護業界の牽引者、教育者として責任を感じ高い志を目指している施設です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎週月曜日の朝の申し送り時に、理念の唱和を行い、事例を通して理念を振り返って、共有している。定期的に社内研修等も実施、地域密着型サービスの意義を学んでいる。新人も努力している。	毎週月曜日の朝の申し送り時に、理念の唱和を行い、日常の中で職員が理念を具体化、実践した内容を発表している。理念に添ったケアであるか？を確認できている仕組みがある。新人向けに新たに理念を理解できるようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	朝夕の挨拶はもとより、区役、老人会、地区の旅行、地区行事への参加、地元の中学生の実習受け入れ、地域と協力し、梅ちぎりや七夕、餅つきなど地域の方の協力により開催できている。	地域の老人会や旅行に利用者が参加している。又旅行に看護師を派遣したりして地域との交流がある。区役には職員が参加している。民生委員からは、梅の枝ごと持参してきてくださり梅ちぎりを利用者さんとしていたりしている。地元の中学生の体験受け入れもある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の学校の福祉体験や実習など積極的に受け入れている。老人会での認知症に関する講座や体操、認知症サポーター養成講座など、認知症の方が住み良い社会にするための提言は積極的に行うことができている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	近隣住民の方達をお招きし、室内構造、ご利用者の状態、その方に応じた避難方法など一緒に検討していたことで、震災時スムーズに避難誘導をお願いすることが出来た。地域からのご意見も聞くことが出来、サービスの向上につなげることができている。	推進会議には地元はもちろん近隣の区長、民生委員さんの参加もある。家族の参加案内はしているが参加は無い。震災の後に、避難時に自分たちが助けにくいとのお話が出て、塀は低くした方が良いとの意見で低く改修した。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の際に、活動内容など詳しく報告している。書類面で分からない場合は、役場にお尋ねし、ご指導頂いている。震災後の地域福祉の維持、発展を図るため、これまで以上に、行政との連携を図っていく。	地域福祉の災害拠点として、震災後に避難所カフェとして協力をしてきた。地域共生を目指し、農福連携をしながら高齢者、子供等と参加している。甲佐町オレンジカフェとして出前講座を計画しそこで自立できるような仕掛けを作っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束とは何か、研修会や資料の回覧を行っている。基本的に深夜(21時～6時)以外は玄関も鍵をかけない。転倒の危険が高い方でも、和室を活用したりし、環境の調整を行っている。スピーカーロックは何気なく使っている場合があるので注意する。	身体拘束とは何か、研修会や資料の回覧を行っている。基本的に深夜(21時～6時)以外は玄関も鍵をかけない。徹底した職員教育で、新人教育や年数回の研修で事例を通して職員が実際のケアで活かせるように指導している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止についても、研修会を行い、虐待の芽となりえる不適切なケアから勉強している。また宿直体制を取ることで、夜勤者の精神的な負担感の軽減にも繋がっている。ご利用者中心のケアを念頭に置き、職員間でも意識の共有は出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修の機会があり、尊厳を守るケアとは何か、事業所のマニュアル等の回覧を行い、共有を図っている。現在、事業所が支援し、生活保護3名となっている。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の際には、重要事項や契約書等ゆっくり説明する時間を持っている。またアセスメントを兼ねて、不安や疑問点などお聞きすることができている。面会時に状態の報告を行い、どの職員もご家族との関係づくりに務めている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年2回、家族会を開催し、運営に関する事などご意見を頂いている。また、面会時に要望等をお聞きし、運営に反映させることが出来ている。今年度も、運営推進会議にご家族、ご利用者の参加を依頼していく。		毎月作成している便りの中で、意見を聞く機会を設けているため、月に1回程度は家族から職員に苦情を言われることもある。筆筒の中身の入れ方などの苦情があったが、後に解決されていた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者・リーダー会議を定期的に行い、ケア内容・経営・運営に関する状況を各事業所報告し、意見を出し合っている。職員にも、ミーティング、申し送り時に会議の内容の報告行っている。		朝のミーティング時間に全員で参加し主任に伝えている。職員も何でも言える関係づくりができていました。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備	管理者と定期的に面談を行っている。また年度初めに、教育計画票に自分自身が勉強したいこと記入してもらい、出来るだけ本人の希望に沿った研修等に参加できるようにしている。子育てしながら安心して働けるよう、配慮している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内では、各職員の研修計画作成し、レベルに合わせて、新人・スタッフ・管理者研修行っている。社内研修も定期的に行い、リーダークラスは新人スタッフへの講義など行えるように勉強している。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組み	熊本県地域密着型サービス連絡会の活動を通して、定例会・懇親会への参加、各事業所の見学会など行っている。開設者研修や、実践者研修の実習の受け入れなど行い、代表より相談・アドバイス等行い、継続してサポートを行っている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	アセスメント行い、ご本人や家族と、どのように過ごしたいかなど初期の面談時に聞くようにしている。アセスメント用紙の記入を家族と一緒に進められている。また、日頃の関わりの中でご本人の想いを汲み取れるよう、全職員			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	最初の段階での面談は傾聴を中心に行う。本人の現状とグループホームのケア、家族の思いとの間にギャップができないように努めている。また面会に来やすい雰囲気作りにも配慮している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ニーズに応じて、他の事業者や他のサービスを紹介することもある。地域外の場合、担当の地域包括支援センターを紹介している。ふれあいホームや、共用型のデイなど、ニーズに併せて柔軟に対応している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	調理や、裁縫、掃除など、その方の力に合わせて一緒に行っている。利用者の方に教えて頂く事も多く、共に暮らすという感覚は根付いていると思う。			
19		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族面会時には、必ず付き添い、話をする時間をもつようにしている。状態の変化時にはその都度連絡している。散髪や自宅帰省など、家族によっては定期的に行われており、病院受診も、できるだけ、家族に同行してもらっている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの地域への外出支援等で、色々な方から声をかけてもらい、利用者だけでなく、スタッフも喜びを感じている。自宅への外出・外泊の支援も、家族と連携している。認知症カフェに参加してもらうこともある。	認知症カフェを月1回、公民館や住民の家で出前講座を行っており、利用者も参加してその地区の出身地での馴染みの関係を維持している。馴染みの散髪屋に連れて行っている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	グループでの回想法等行い、どんな事をされてきたのか、など話をしたりする。利用者同士でも自然と会話が弾むように、景色や、小物等準備し環境の調整を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	49日前後や初盆にグリーンケアとして、ご自宅に伺いご家族の状況を見て、思い出話などしている。家族によっては、ボランティアとして関わってくれている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉の出にくくなった方、思いを伝えづらくなった方の思いに配慮することの出来るスタッフが多い。ミーティング等を通して、本人がどう思っているのか意見を出しあっている。		入所前に家族から以前の暮らしを聞き取り、情報を整理しながら仮のケア計画をたて、入所後に利用者本人の言動に応じて、ケアに活かすために変更している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時のアセスメント以外にも、紐解きシートなど活用し振り返るようにしている。ご利用者、ご家族との日頃の会話から、これまでの暮らしについてお聞きする機会が多い。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	できることできないことシート活用し、状態の把握に努めている。身体状況に合わせて、バイタルチェック行い、健康管理に努めている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各担当でプランの評価、再アセスメントを行っている。朝の送り時やプランの検討の際にできるだけ多く意見を出し合うようにしている。職員1人1人の細かい気付きや意見を反映させたプランの作成を行っていきたい。		ひもときシートと言う研修シートに、「なぜ?そのような行動」といったのか?」を全員で検討している。それを踏まえてそれぞれの計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録に関しては、不十分で、たくさんの気づきや情報はあっても口頭で伝えてるだけで記録に残っておらず、ケアに反映されていない事が多い。スタッフの細かい気づきは多いので、意見の集約ができるように申し送りなどの環境を整えている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ふれあいホーム等も行っており、緊急時の宿泊等、柔軟な対応を行っている。老人会や地域の敬老会参加の為の送迎、震災時の避難所での支援など、柔軟に対応することができている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物やドライブなどその方の生活歴に合わせて支援するようにしている。季節の行事など、地域の方が主になって支援して下さることも多い。イベント時にはボランティア等活用できているが、まだ日常的には地域資源を活用できてない。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	基本的には入居以前から通っていた病院に通院するようにしているが、看取りの時期や、移動の負担、緊急時の対応など、状態に応じて協力医療機関に担当してもらっている。家族が通院介助される場合は、情報提供書作成し連携している。		入居前のかかりつけ医に家族の同行受診を中心に継続している。その他の方は月2回往診を受けている。過去には15人の看取りをした実績がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるよう支援している	グループホーム内に正看護師1名、准看護師2名勤務。24時間、何かあればすぐに状態報告し指示をもらっており、介護職の不安の軽減にもつながっている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを	できるだけ早く退院できるよう、面会や電話連絡など密に行い状況確認している。せせらぎでできる重度ケアの範囲等説明し、退院後の対応等、医師と話し合っている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化し看取りの必要性が生じた場合の指針を作成し家族に説明している。利用者の状態により、ケア会議行い、家族の意向や本人の希望等、再確認し、一緒に話あう機会をもっている。家族の要望はもとより、ご本人の意向をしっかりと汲み取れるよう、配慮していく。		サービス担当記録に記載し看取りの方針を立てて共有している。看取り契約をあえてせず、家族や本人の気持ちの揺れにそのまま付き合うようにしている。看取り体制は施設の看護師と往診医との協力体制があり、過去、現在も看取りは継続している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命蘇生法の研修の参加行っている。マニュアル等確認しておくよう指示している。勉強会以外にも、日常的に看護師より、緊急時の対応方法、観察、報告の仕方等指導してもらっている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地域の方と一緒に、年2回避難訓練を実施し、協力体制を確認している。地区の自主防災組織を作成してあるが、活用ができてない。組織を活用した訓練を、地域の方と一緒に進めていく必要がある。		火災はもちろん、地震や風害等の防災対策についても施設で作成されていた。避難訓練が年2回実施されており、近隣住民の応援要請の了解も得ている。	実際に災害が起きたときに即座に対応できるような具体的な避難先の確保と実際にどう動いて行くか等を見える形にするような工夫に期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	介護理念に沿って、自分達のケアを、振り返り、家族のような関係ではあるが、言葉遣いなど、配慮が足りない時もあるので、本当にその方に合っているのか、定期的に検討していきたい。	トイレの際には、タオルを掛けて見えないように配慮している。又職員はもちろん運営推進会議の参加者にもプライバシー保護の契約をしている。新人研修の内容にも項目を入れて研修している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中では、本人の思いを尊重し、動きとしては自由に過ごしてもらっているが、トイレや、入浴、その日の流れ等はスタッフの都合に合わせてしまっている場合もある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な1日の流れはあるが、柔軟に対応するようにしている。要望に合わせて、外出等はできるだけ行っているが十分ではない。希望は聞いているが、重度者も多く、一人ひとりの希望に沿った支援が、もっと必要だと思われる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	美容室は今まで通われていた場所に、家族が連れて行って下さったり、送迎を行ったりしている。外出時はお洒落をしようが、日常的に衣類を選んだり、お洒落を楽しんでもらう、といった意識は不足している様に感じる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の方に合わせて、下ごしらえ、皮むき、味見、台拭き、後片付けなど行っている。頂いた野菜や、畑で収穫した野菜を上手く活用して会話に活かしている。	利用者の好む場所で、好きな時間で食べられるようにしている。又何度も食事の要求がある人に対しても体重などの事も配慮しながら分けて配食するなど工夫し要求に応じている。好きな音楽等をかけたり、利用者の希望で夜中に毎日バナナを食べてもらっているなど、各人に寄り添った対応ができている	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居1～2週間、退院後、状態の変化時に記録様式を変更し、状態の把握に努めている。食事にムラがある方は1日3食と考えず、食べられる時に、食べられるだけ、の意識でケアしている。状態に合わせて形態も変化させている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者の方の状態に応じて、歯ブラシやスポンジを使用している。訪問歯科の利用も行なっている。毎食後は実施できていない人もいる。本人に出来る部分は積極的に行ってもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	できるだけ日中は、オムツ使用せず、布パンツで対応し、トイレでの排泄をすすめている。排便の調整がうまく行かず不快な思いをさせてしまっていることもあり、排泄パターンの確認と検討、実行の必要がある。	個別の排泄チェックを記録している。日中はできるだけトイレ誘導をしている。時間誘導で個人で対応してきたが、更にその日の体調に添いケアをしている。毎朝の申し送りに時間を掛けている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ヨーグルトなどの乳製品や繊維質の食品など、意識して食べて頂き、食事や効能の勉強を行っている。個別には、個人でヤクルト等購入し飲まれたりもしている。できるだけお薬に頼らない支援を実施している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	お風呂場・脱衣所が利用者にとって楽しめる環境になるように検討が必要。2人介助の方はどうしても職員の都合で入ってもらっている事が多い。	浴室が2か所あり、利用者に合わせて入浴している。看護師が配置されており重症者でも健康チェックをしたうえで入浴されている。日曜以外は毎日入浴することができる。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	座位の状況や体調に合わせて自室やこたつに休んでもらっている。長時間の座位は避けてこまめに椅子や場所を変えるようにしている。眠れない時は一緒にリビングで過ごしたりしている。体調に合わせて柔軟に対応している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の作用、副作用、用法、用量については処方箋をファイルし閲覧している。薬のセットの際にも間違いがないように、薬箱にも貼付し、準備の時に毎回確認している。新しい薬は、効能等詳しく調べ申し送りで確認している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個人によって差はあるが、生活歴の把握はできている。生活歴を生かしたケアが、毎日の役割としてはあるが、1人1人に特化した支援という点では不足している。本人の力を発揮できる様に、支援のあり方を検討していく。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買物や、散歩等希望があればできるだけ行っている。重度の方も外食、温泉等行けているが、日常的ではない。遠方への外出を希望する人も少ないのが実情である。工夫が必要。	買い物ができない利用者が多いので希望があれば対応している。気候が良いときには近隣に散歩している。ただ、外出できない利用者が多くなっている為、外出の頻度は少なくなっている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理は職員が行っている。買物の際は自由に選んで買って貰っているが、金銭の管理を自分でできている方はいらっしゃらない。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人希望時はいつでも、電話をかけて頂ける環境である。家族にも了承を得ている。お手紙など届いた際は代読している。電話をすることがもっと日常的であってもよいと考えるが、現在は実施できていない。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花や、旬の野菜を飾ったりして、季節を感じて頂いている。より、認知症の方が安心して過ごすことの出来る環境作りについて、工夫していきたい。縁側で一人過ごす方には優しい音楽を聴いてもらっている。		元々が民家であり、畳の部屋がほとんどである。床の間や掘りこたつ、座敷等があり昔ながらの生活が漂う空間づくりがなされている。玄関には、黒電話、ミシンなどがおかれていて、利用者がこれまで生きてきた時代の雰囲気を感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	こたつ間や縁側はゆっくりできる空間であり、他の人からの逃げ場にもなる。リビングに合わない方やゆっくりしてもらいたいときに活用できている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	初回に家族と相談し、できるだけ思い出深い物を準備してもらおう。安全を重視してしまい、その人らしい居室作りというのは不足していると感じる。本人、家族と相談し、居住空間を一緒に作っていきたい。		各人の個室は、畳間にしてあり、懐かしい雰囲気がある。思い出の品物等も持ってきてあるが、それぞれの個性を活かしきっていると は言えない。	その人のこれまでの暮らしぶりが垣間見れたり、個人の好み活かされるような工夫に期待します。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	室内は基本的にはバリアはない。玄関に段差があるが、リビングに向けてスロープを作っている。最低限の手すり、廊下のソファ、職員の見守りや介助がトータルに安全を確保することになっていると考える。			